

(28)

やまもとじつぞう
山本實蔵

實蔵は、一八五〇年（嘉永三年）十月、石川惣四郎の長男として高棚村（現高棚町）で生まれた。

一八七一年（明治四年）、野田村二本木（現二本木町）の山本彌助（士族）の長女やまと結婚し婿養子となった。当時二本木は、二本木山といわれるほどの原野であった。實蔵は日夜、山地の開墾に精を出し、農地を少しずつ増やしていったが、生活は苦しかった。

一八八〇年（明治一三年）に明治用水が開削され、明治用水中井筋が通水すると、水不足も一気に解消され、畑はほとんど水田になった。一八八七年（明治二〇年）ごろには、五十戸ほどの入植者があったという。

實蔵は、一九〇七年（明治四〇年）ごろ安城農林学校の農場指導員として、生徒の指導にあたっていた。当時、農場ではアメリカからアイスクリーム種、スイートサイベリア種などの西瓜の種子を取り寄せ、西瓜の栽培を行っていたが、在来種の西瓜よりも糖分の多

い品種であった。

實蔵は、アイスクリーム種の種子を譲り受け、開墾した土地で自然交配を繰り返しながら西瓜の栽培を数年行っていたところ、在来種やアイスクリーム種とは異なる別の品種がたまたまできた。この西瓜は、当時、虎皮西瓜（野田西瓜、山本西瓜）といわれた。

この西瓜のことが碧海郡一带に伝わると、栽培農家は次第に増えていった。この西瓜を岡崎市などの市場に持って行く農家もあったが、奈良県産や富山県産の西瓜に比べて評判はあまりよくなかった。

一九二二年（大正十一年）ごろ、碧海郡農会は市場で評判のよかった大和西瓜の種子を、奈良県磯城郡や生駒郡の農会から譲り受けて栽培したところ、この西瓜は、この地域で栽培していた虎皮西瓜よりも、はるかに甘くおいしい西瓜であった。郡農会では、この大和西瓜にすべて品種を統一し、三河西瓜の名称をつけて出荷したところ、市場での評判は大変よかった。そのため、農家の中には岡崎市

や近隣の市場へ出荷する人も増えていった。

碧海郡農会や安城町農会では、各ムラの青物出荷組合を指導し、共同出荷・共同販売を強力に進めた。また、規格の統一・栽培方法の改良・販売方法の改善等を行った結果、稲作よりもはるかに高い収入を得ることができたため、西瓜の栽培面積は急激に増加した。

大正時代の末期には、安城町では二百町歩（二百畝）も栽培されていた（安城農報大正一四年八月号）。安城町では里、今、赤松、福釜、箕輪等のムラで栽培が盛んであった。

東京や大阪などの都市や中国大連にまで出荷していた三河西瓜も、一九三一年（昭和六年）ごろから栽培面積も次第に減少していった。それは、不況等によって価格が大幅に下落したこと、西瓜は忌地性が強く連作ができないこと（六、七年は同じ場所に作付けできない）、この地域より有利な産地が多くでき競合するようになったことなどが理由であった。

このような状況の中で、一九三一年（昭和六年）七月、安城町北明治の碧海説教場で、愛知県西瓜栽培業者大会が開かれ、出荷の調整を図ること、継続出荷を実行すること、確実な販路の獲得に努めることなどの決議や宣言が採択された。しかし、一九三五年（昭和十年）を過ぎると栽培面積も激減し、三河西瓜の名は次第に消えることとなった。



山本實蔵肖像
（二本木町／山本實也氏所蔵）

文 稲垣維晃